島根大学教育学部紀要（人文社会科学）第16巻　55～69頁　昭和57年

一吃音児の遊戯治療過程の研究

小　椋　たみ子*・大　西　俊　江**

Tamiko OGURA and Toshie ONISHI

The Study of the Process of the Play Therapy for a Stuttering Child

Abstract: In this paper we reported the process of play therapy for the stuttering boy of 3 years and 1 month. It was supposed that the cause of his stuttering is the hereditary trait, his personality and the parental or environmental pressure. He did not experience the basic security in infancy.

We gave him 20 sessions of group play therapy and afterwards 33 sessions of individual play therapy during one year and ten months. If we had treated him through only individual play therapy, it would not have taken such a long period. The process of play therapy was divided into six phases. The first is the introductory phase. The second is the resistant phase. The third is the phase when he expressed the aggression and the desire to be loved. The fourth is the reconstructive phase of his ego. The fifth phase is the separation from play therapy.

He recurred the stuttering and underwent the play therapy again. The sixth is the recurrence phase and the repetition of the fourth and the fifth phase.

He stuttered most heavily in the third phase—the aggression and the desire to be loved. Stuttering decreased in the fourth, the fifth and the sixth phase. We think this play therapy contributes to strengthening his ego.

I　はじめに

吃音とは，発語に当たり，躊躇・引き伸ばし・くり返し・ブロックなど流暢さを欠く話し方を示して，注意を話しことばや，話し方に集中するため，聞き手とのコミュニケーションが妨害され，努力性発語，けいれん性発語，心身の緊張などを生じ，対人的不適応や感情的諸問題をもたらすときをいう（内須川，1979）。

発吃は，ほとんど大半が幼児期，特に3歳前後に集中する。発吃初期の段階では，初頭音の繰り返しや音節のくり返しの言葉の引きのばし，発語がつまって出にくい等の現象がみられるが，発語を意識することはない。この段階の吃音は一次性吃音とよばれる。これに対し二次性吃音というのは，発語の流暢さが欠けるというだけでなく，発語の障害に対し情緒的に反応する。即ち恐怖の発生に始まり，これが原因でブロックを生じ，これを回避したり，軽減する反応が種々生じる場合をいう。

吃音の原因については，従来から多数の学説がみられるが，まだ統一した見解はみられない。なんらかの神経学上の欠陥，あるいは遺伝によるという考え方から環境的ストレスにその原因を求める立場まで様々である。Bloodstein (1977) は，吃音の原因，治療については，過去50年前からの問題であり，沢山の理論がでてきたが，まだ解答はだされていない。吃音者と非吃音者の明確な体質やパーソナリティのちがいの証拠はみいだされていない。しかし発生学的研究は，吃音が同一家系の中で発見される割合が高いことを示しており，吃音が遺伝的要因と環境的要因の両方の産物であることを示していると Bloodstein はのべている。

吃音以外の言語障害では，いかなる場面においてもほ

* 島根大学教育学部障害児研究室
** 島根大学教育学部教育心理研究室

ぼ同様に言語上の問題が出現するが，吃音は場面によって大幅な変化がみられる。一人で部屋で朗読しているときには，殆ど流暢性に問題を示さないといわれている。これは，吃音の発生に対人的要因が大きく関与していることを示している。

神山（1967）によれば，一次性吃音は生れつきの人格，または遺伝によってことばが特に分裂しやすい傾向を持った子供において，環境的圧迫が言語機能の破壊を促進する働きをする場合に生ずる。

吃音の発生に関与する要因を明らかにしようとこころみた研究に，川口（1960），柳川ら（1962），松岡（1965），柳川ら（1974）の研究がある。この中で3才までに発症した26名の幼児について調査した柳川ら（1962）の研究では，26名のうち21%の家族に吃音者がいること，養育者の養育態度は，普通型が少なく，支配，服従などの問題型が多いこと，また90%の子どもは他の問題行動をあわせもっていたことを報告している。これらは幼児期の吃音に親のあり方が起因として影響していること，そして情緒障害の1つとして吃音をとらえる必要があること，そして指導においてその点を考慮する必要があることを指摘している。川口（1960）の研究は対象年令が6才から23才までと広範囲にわたっているが，吃音者の家族関係においては，父子関係は母子関係や同胞関係よりも大きな問題性が介在し，それからおこる心的因子が吃音の発症を助長していること，吃音者の言語環境，特に父親の吃音，両親や同胞の言語に対する態度，及び速音的傾向が患者の吃音発症を助長していることを指摘し，家庭環境，殊に言語に関する環境の調整を主とし，精神療法を行うことの重要性をのべている。松岡(1965)は，3才1ヵ月から5才10ヵ月までの幼児20名の吃音症状に関する要因の分析で，吃音児のパーソナリティは，外向型，退避型，神経質の混合型の3つの特徴が認められ，吃音症状以外にも情緒的障害を併発していること，近親者に吃音症状があるものや，経験したものが多いことと指摘している。家族環境についてここでくわしくのべることはやめるが，父親，母親ともパーソナリティ，養育態度に問題があり，家庭内の雰囲気も，母一祖母間の葛藤，両親の不和乃至葛藤，同胞間の葛藤及び敵意感情などの対人関係や経済的圧迫，思想の相違から家庭に高い緊張がみられることをのべている，治療法として親子両方への心理療法を行い，特に幼児においては，家庭における人間関係を円滑にするために妨害要因を除去し，情緒的緊張を解消させることが必要であるとしている。

吃音幼児に対しては，幼児期の情緒障害の一種とみなし，発声，発音の訓練をするよりも欲求不満のはけ口を与え，情緒を安定させ，自我を強化する目的で遊戯療法が一般に用いられている。また子どもへのアプローチ以上に子どもへの環境的圧迫となっている環境を変容させるために親の指導がなされている。子どもへの遊戯療法と母親面接を行なった報告として，玉井（1959），権平（1960），秋山（1970），日下（1970），若葉（1968，1970，1971）らの報告がある。

筆者らも，素質的なものを基盤に，心理的原因により吃音症状を呈していると考えられる一幼児に遊戯治療，並びに母親面接をこころみたので，ここでは，子どもの治療過程について報告する。治療過程の中であきらかになった本児の問題を分析し，どのような過程をへて自我が強化されていったか，子どもの行動をおってあきらかにしていく。

II　症　　例

ケース　C児（以下Cと略す），治療開始時3才1ヵ月，男

主訴　吃音（2才8ヵ月のころより），遺尿

生育歴　母親は妊娠中，流産の徴候があり，妊娠2ヵ月から5－6ヵ月まで入院し，服薬，注射を受ける。妊娠中毒症があった。本児出産までに2回流産の経験がある（3ヵ月時と5ヵ月時）。本児は予定より20日早く帝王切開で生まれ，保育器に1週間入る。生下時体重2330g。黄だんは普通。出産時にpenisに傷をつけられるが，泌尿器科の診察では排泄に問題はない。

乳児期は手のかからないおとなしい子で，乳の飲み方は普通，人工栄養でなけばあたえた。離乳開始は3ヵ月で簡単だった。風邪，消化不良にかかりやすかった。風邪で，毎月通院しており肺炎でこれまでに4回入院している。自家中毒によくかかる。

発達の経過は，首のすわり4－5ヵ月，初歯6ヵ月，始歩1才1ヵ月，言葉はかたこと10ヵ月，2語文は2才，3語文は2才すぎである。

家族　本児の家族背景については，大西・小椋(1982)に詳述したのでここでは簡単にふれる。

実父（32才）は，一人っ子で父親とはやく別れ，祖母に育てられた。高校卒の公務員。早口。

実母（28才）は三人同胞の長女。父母とも健在。高校卒。

父方祖母（56才）は，サービス業に従事し，治療開始時は住みこみで，1ヵ月に4－5回帰宅。本症例治療開始後6ヵ月の時脳出血で倒れ，入院。

父方祖母と，父方いとこに吃音がある。

相談歴　発吃1カ月後，電話相談。3才児健診（児童相談所より本学へ紹介）

インテーク　プレイルーム（以下 PR と略す）での母親との遊び，K式乳幼児発達検査，ことばのテスト絵本により構音，吃音を調べた。

母親との遊び　子どもがリードし積極的に遊び，母親は遠くからみていることが多く，積極的に働きかけたり動いたりしない。砂場に靴下で入る時入ってもいいか許可をもとめた。

吃音　ことばのテスト絵本をみながら，絵の名前をいう場面では，自発反応はひきのばしと語頭のくり返しがみられた。随伴現象はない。模唱では吃音はなかった。非常に高い，大きい声をはりあげ，頑張りすぎて無理がある。

構音　ことばのテスト絵本の絵に対する反応から次の音の代置がみられた。〔t/k〕[注1]〔d/g〕〔t/s〕〔d/z〕〔dzj/dz〕〔tʃ/ts〕〔t/ʃ〕〔d/gj〕で規則的な代置がなされていた。また，タイタイ，ニャオなどの幼児語を使用する。

K式乳幼児発達検査　DA 3才1カ月（CA 3才1カ月）DQ＝100　運動面の遅れはない。

インテークでの行動観察，諸検査より，本児が自分のことを〝オニーチャン〟といい，遊びでも，検査でも，頑張りすぎ非常に無理，緊張がある。これが症状にあらわれていると推察した。そこで，情緒の解放と自我の強化を目的とし本児へ遊戯療法をこころみた。

Ⅲ 方　　法

1. 集団遊戯療法

本児を含む表1に示した子どもと3名のセラピスト[注2]の自由な遊びを週1回，1時間，計20回実施した。集団に参加した子どもの年令，実態は多様であり，集団での子ども同志のかかわりを大切にしたが，個別的な援助が主になった。セラピストは遊びをリードせず，子どもからの動きを重視した。子どもに接する態度は Axline　小林訳（1959）のいう8つの原理を重視したが，子どもの状態，動きに応じた柔軟な対応をするようにつとめた。また子どもの行動についての解釈は精神分析学的な観点からも行い，子どもが遊びで何を表現しようとしているかの意味をよみとりながら，子もとのかかわりをすすめた。

2. 個人遊戯療法

20回の集団遊戯療法では本児の症状は消失せず，筆者が，さらに33回，子どもへの遊戯療法を実施した。33回のうち19回は弟が来室したので弟担当者が同室した。セラピストの態度，時間は，集団遊戯療法と同様である。

なお，母親に対しては別室で母親面接が行われた。

またセラピストとの集団，個人遊戯療法の前に，母子間の遊びを促進し，また母子のインタラクションの変化をみるために母子プレイの時間を15—20分間設定した。またセラピストとの遊びは，おやつを食べておわりにした。全場面をＶＴＲ録画した。

Ⅳ 治 療 経 過

集団遊戯療法と個人遊戯療法での各回の子どもの行動，印象をＶＴＲ再生と，各回終了後の記録をもとに，冗長になるが，回をおって記述していく。

集団遊戯療法の過程（第1回—第20回）

第1回　砂場の側で，Th とままごとやダンプカーへの砂の出し入れをする。Th がM児の方へ運ぶようにいうが，反対の方向へ行く，野球をしているM児達の方をみていたので，Th がバットをわたすが振りおとす。Th がCの行動をひっぱるとぴしゃりと拒絶し，頑固で堅い

表1　集団遊戯療法への参加児の概要

氏　　名	性	治療開始時年令	発達年令（DQ）注	主　　訴	出席回数
C（本症例）	♂	3：1	3：1（100）	吃音，遺尿	19
M	♀	4：0	3：2（79）	構音不明瞭，おちつきなし	20
N	♂	2：4	2：2（92）	意味のあることばがいえない	16
Te	♀	4：1	2：9（67）	知恵が遅れている，おちつきなし	7
H	♂	1：11		Mの妹	28
R	♂	0：9		Cの弟	8

注　Nについては田中ビネー知能検査，その他はK式乳幼児発達検査を使用した

注1 〔k〕が〔t〕（カ行がタ行）に代置されていることを示す。その他の音についても同様。

注2 弟参加の場合は弟担当者を補充した。各セラピストは以下 Th（筆者），Thf，Thm と記した。

印象をうけた。Cが砂場にいない間にM児，H児が遊んでいると〝オニーチャンダヨ〟と自分の領域を侵されたようにいう，砂場へ自転車をのりいれ，ベルをならし自分の領域であることを主張。Th は，まずはCの動きに従っていくことにする。

第2回　M児が後に乗った Th の自転車をトラックに乗りはげしく追いかけ，砂場を何周もする。M児が自転車をおりると Th に自分のトラックの後にのってもらいたがるので Th は乗る。M児，H児，Th と一緒にままごとをするが他児が持っているものをみて〝オニーチャンモ〟とよくいう。後半，プールにM児と乗り Th に運んでもらう。表情が生き生きとし歓声をあげる。M児の行き先は富山（父母の故郷）。Cの最初の行き先は東大，次は島大。プール以外は表情が堅く，Th が働きかけても壁があり，支配的で，小さい大人の印象をうけた。

第3回　元気がよく発語も多い。M児，N児と砂遊び，ままごと，レールつなぎをする。スベリ台から棚にあるすべてのボールを投げる。N児が，Cがいつも乗っているトラックに乗るとける。〝オニーチャンモ〟が依然強い。しかし他児に電車をとられてもとり返さなかったり，シーソーがこわくて，他児と一緒に乗っていても一人だけ降りたり，弱い面がある。

第4回　吃音がはげしく非常に支配的。自転車に乗っていてCの行く道に，他児が遊んでいるとベルをけたたましくならす。お殿様のお通りだからどけという感じ。Th やM児に鉄砲をうつ。机で粘土をする。カタカタを使おうとしてM児にダメといわれすぐに逃げる。Th はCの遊びに従いCの支配欲求を満足させ，たまっているものをだし，他児と正面からぶつかれるよう自我を強くすることが大事だと考えた。

第5回　M児とバットの打ちあいをして，M児が振ったのがCにあたり，床に倒れて泣きだす。Th が抱くと激しくなく。抱かれて部屋の中を見たり，棚にあった兎が映るＴＶをみる。弱々しく幼く兎のよう。Th がツミキの側におろすと，ツミキをただ並べたり箱から出したり入れたり，静かなエネルギーの回復過程のかんじ。しかし，側でH児，Thm が絵ツミキをしていると絵の名前を吃りながら高い声でいう。

第6回　トラックが自分を保護してくれるものになり，トラックでしかＰＲを動けない。M児がハンドルをさわると進めない。N児がトラックに乗ろうとすると自分が運転手になる。机で Th と粘土や，手にのりをべったりつけハリ絵をする。他児とは関係をもたない。Thm とM児のバットのうちあいをこわそうにみる，買物に行こうと Th をつれて一時退出。戻ってからも粘土とハリ絵。全体として作業したままで動かない。おもらしをしていた。

第7回　母親面接室に行き戻ろうとしない。母の所へ行きすぐ窓へ行く。Th と山や庭のことをはなす。吃らずやわらかい雰囲気。母と一緒にＰＲへ戻り線路をつなげている間に母がいないのには気づかず遊びだす。他児と関係をもたず，黙ったまま，部屋の中を四つんばいになり下をむいて自動車を走らせる。おもしろそうでない。この弱い，動かない状態が続くことが予想されるが，この状態ををサポートするのが大事。

第8回　M児がくれたヘビ笛を他児の輪に背をむけ気乗りしないがやる。プールの中のものを投げつけるように捨て中へ入る。M児がとんできて一緒に入り Th に運んでもらうが第2回ほど楽しそうでない。ピストルを持って入り行き先は東大と島大。スベリ台の上やトラックから Th や他児にむけてうつ。ピストルをトラックの荷台にかくす。Th がかかわりを持たないと，ピストルでうったり，ツミキを倒したり，M児の乗ったプールをひっくりかえそうとしたり攻撃的である。一方，シーソーに乗りながら Thm と人形を通して話したり，シャボン玉をやったりの柔かい面もある。

第9回　皆から離れて，黙ったままシャボン玉をする。他児がくると，誰もいない所へいく。スベリ台でM児が反対側から登ってくると降りてしまう。ねころがりＴＶの兎をみる。砂場の中にまわりにあるバス，トラック，自動車を投げいれる。砂場に Thm と橋を作り這這してわたる。Th がツミキを箱からだすとおおいかぶさり〝オニーチャンノダ〟と所有を主張。Thm と幼稚園をつくる。つくったのをけり再び作る。おしっこをちびっていた。

第10回　入室困難。ＰＲの入口で這這して入らない。何事にも熱中しない。救急車を床に走らせ，疲れたといって横になり，再び元気になったと走らせる。Th は後をついてパトカーを走らせる。M児，Thm と池を掘りお兄ちゃんの方が大きいと言ったり，M児のつくったシャボン玉を足でつぶしたり，おやつを食べおわると〝モウモウイヤ〟といって席をたち，トラックに乗り声をあげ，楽しくない。一人だけ違う歌をうたい，皆がそれにあわせると〝ニーチャンノカチ〟[注3]という。弟が泣くと〝オカアチャン，アカチャンナイテルヨ〟とどなりコップを投げつける。

第11回　入室困難。這這して絨毯へ行き，寝ころがり

注3　Cの発音はp.57に示したように誤構音があるが正構音で記してある。以下同じ。

絵本をみる。右手に赤ちゃん人形，左手にウルトラマンを持ち Th の怪獣や Thm，M児の遊んでいる動物をやっつける。シーソーをCの領地にし，砂の箱の Thの怪獣を〝トートー〟とすごい勢いでやっつける。足で踏みつける。Th は一緒に戦いCの攻撃エネルギーを出させたが，側にM児，H児がいて充分Cのエネルギーを受けきれずストップさせてしまっている。Thf をける。ウルトラマン，ライダーはCにとり自分を守ってくれる大事なもので，おやつの時も一緒にもってくる。攻撃的な面と這這したり，赤ちゃん人形を抱いたりの退行した面がでてきている。

第12回　夏休みで23日ぶりに来室。入室困難。ウルトラマンを持ち Thf の動物をやっつけるが攻撃の時間は短い。ウルトラマンを持ち，プールをお風呂にして長い間入っている。髪を洗うまねをしたり，Th がお湯をかけるまねをする。弟が風呂に入ろうとすると怒る。M児が自転車のベルをならすと風呂の中から〝ウルサーイ〟とどなる。ライダー等の大事な人形をかかえて机に行き他児の遊びを見ている。パトカー，ぬいぐるみの犬を大事そうに抱く。自分も甘えたい表現であると思われる。

第13回　入室困難。今回は攻撃行動はなく穏やか。大きいスコップで箱に砂をいれ，木や動物を並べる。他児と一緒に象になり，御飯を食べさせたり，お風呂にいれたり，寝かせたりする。象を気に入り大事そうに抱き，象にC自身がなりきり遊ぶ，弟が泣いて母親が入室し，弟を抱くとCはプールを足でけり，口を歪め，嫉妬する。

第14回　入室困難。ウルトラマンを持ち Th の持つ怪獣をやっつける，M児が遊ぼうというが〝ヤダ！〟砂箱へウルトラマンを並べ，反対側に並べた Th の怪獣を〝ピーピー〟と高い声をだしやっつける。砂の中を激しくウルトラマンを動かす。Te 児の落した野菜を食べるまねをしたのをきっかけに，部屋中の玩具，自転車，イスまですさまじい勢いで食べてまわる。そのあとCは犬の口を大きくあけ，はげしく粘土の御飯を食べさせる。M児をほめると〝オニオニオニーチャンモ〟，〝Mちゃんは4才ねCちゃんは3才ね〟というとCは5才の指をする，他児へのはりあいが強い。攻撃性がはげしく，口唇レベルの欲求を表現しているが，集団場面で受けいれきれずCの治療的葛藤をかえって強くしている。Cの要求を徹底的に受けいれる為，Th は他児とかかわらずCとだけかかわるように次回からする。母親面接でCが家で這這したり，母が弟にすることを自分にもやってもらいたがるとの報告があった。

第15回　吃音がひどい。家で這這したりすねる。〝お母さんお兄ちゃん好き？〟と何度も聞く。大好きと答えると大喜こびするが，あまりしつこいので大嫌いと言うと泣きだすとの母からの報告あり。

入室困難。戸のところで〝モウイイカイ，マダダヨ〟や汽車の歌をうたう。今回も攻撃行動と赤ちゃん行動の両方がある。人形を抱いて，粘土のごはんや，哺乳瓶でミルクを飲ませる。絨緞に座り白鳥の湖のオルゴールを聞いたり，Th に足をふいてもらう。カメンライダー等の人形を砂場にたて Th の怪獣をやっつける。ライダー等の人形を箱にいれて持ち歩き，他児がほしがると〝ダメダメ！コレワオニーチャンノダ〟。トラックの荷台に隠す。N児がCの乗っているトラックの後にのると〝マター，ドケー！〟とどなる。N児が降りるとPRを激しく走る。

第16回　〝今日はお休み〟と廊下でいう。後向きで部屋をのぞき入室。家をつくり，自分の作った家の上にのり，こわし，また作る。N児もCの側で Thf と家を作る。それをみて大声でわめき，N児の家を手でこわし，倒れたツミキを踏みつける。N児も仕返しにCの家をこわす。CはN児ののっているトラックにツミキを投げる。直接N児に投げるのを Thf に制止され，荒れ狂い他児の遊んでいる所にも行き机の上のものを払いおとし，椅子を倒し，自転車の篭の本をおとし，抵抗する Te 児にむかい高い声で叫ぶ。そのあとCはツミキの所へ戻るが〝ナンニモデキンワ〟とトンカチを捨てる。Th がピアノをたたくととんできてひき，ややおさまり，安定を求めるかのようにツミキの箱に入る。Th が運ぶと嬉しそう。そのあと他児と机でナイフで粘土切りをする。

第17回　廊下で〝ウァーウ〟と声を出し，這這して入室。今日は非常に支配的で競争心が強い。Th がぬいぐるみの犬をもって犬になり，Cがつくってくれる御飯を食べる。楽しそうに，威張って御飯をくれる。Th がですぎたことをすると反発する。自転車でPRを動き，行く道に玩具があると，けたたましくベルをならす。他児がスベリ台に登ってこようとすると〝オニーチャンガイチバン，ソコマデソコマデ〟と金切声をあげ他児を阻止する。他児が話すと負けじと声をはりあげる。他児が楽しそうに笑っていると〝ウルサイ！〟とどなる。自分の気にくわないことがあると大きな声で叫び，自分自身をさらけだしている。

第18回　風邪で休み

第19回　なかなか入室できず，アカンベー，アンポンタン，足が全部痛くて歩けないという。きんきんしてイライラしている。M児が遊んでいた野菜や食器の入った

箱をける。Thf のもつストロンガーとCのウルトラマンを戦わせる。自転車の籠の物や乳母車を倒して踏みつける。H児，M児が遊んでいるところへきて，手でたたいたり，ザルを投げつけたり，ツミキを投げたりする。他児が笑うと〝ウルサーイ！カメンライダーガネテルデショ〟とどなる。顔は赤ん坊のよう。M児がCが，椅子の上に寝かせておいたライダーをさわるとハサミをふりかざし，いまにも投げつける格好をして威嚇する。ライダーをかかえて，絨緞で御飯を食べさせたり，M児の作ったツミキの道路の上を車を走らせる。

第20回　入室困難。母が呼ぶと〝ウルサイナー〟Th が呼ぶと〝アンポン，アカンベー〟。Th に手をふりかざし入室しトラックを倒す。Cのアマゾンと Thのオートバイをスベリ台で競争させたり，ウルトラマンを宙返りさせる。他児が笑うと前回より穏やかで〝ウルサイデスヨ〟。Cの大事な人形に御飯をあげる。時々砂場にいるM児，H児にもあげにいく。Th と歌をうたう。Th が間違えると訂正する。Th が他の歌もうたおうとすると〝ウルサイ，イケン〟という。H児がライダーを覗き込むとみせてあげる。おやつの時〝Mチャンライダースキ？〟と聞き，ライダーをM児にあげる。M児もCに〝スキ，トモダチニナロウネ〟という。その後，CはH児，N児にもライダーをあげた。今回は前回より穏やかだった。

個人遊戯療法の過程（第21回―53回）

20回のグループ指導をおえ，お別れ会をし，2週間後に個人遊戯療法を開始した。弟が来室したときは，弟担当者が入室した。

第21回　エレベーターから降り柱の陰に隠れるが，母から今日は一人だといわれスムースに入室。ライダーを持ちスベリ台の上で〝トヤ，ピー〟と声をあげる。弟がついてくると制止する。Th がCの大事な人形の名前を聞くと嬉しそうに1つづつ教えてくれる。ぬいぐるみの犬，パンダ，ウサギにCが食物を作り，Th が動物の口にいれる。ウサギとパンダをおんぶしたり，抱いてスベリ台をすべる。声までパンダのようにかわいい声を出す。Cがトライアングル，Th がタンバリンを持ち歌をうたう。柔かく，なごやかな雰囲気だった。

図1　第22回　　ライダー達が守る山と山の動物園

第22回　母子プレイの続きで黒板に描画。ウルトラマン，ライダーを持ち〝ピーピー，ウルトラマン，ツワー，トートー〟といって遊ぶ。大きいスコップで砂をすくい，Th と山を作る。Th には〝モウチョットヤレ〟とか命令する。Cは自分は強いといって大きい山をつくる。バケツを頂上にひっくり返し，まわりにライダー等を置く。自分からもう1つ山を作り〝ジャンプ！〟と頂上にのる。とんだあとを固め，再びとぶ。象，キリン等の動物を右向きに山に登らせる（図1）。左の山はライダー達が守り，それとは反対方向に動物が山を登り，Cの上昇していく，強いエネルギーがあらわれている。Th には靴下をぬがせてもらったり，〝ハナ！〟といってハナをかんでもらう。

第23回　母子プレイの続きで，砂場に飛行場を作り，飛行機をとばす。ウルトラマンを持ち〝ローター〟とトランポリンで遊ぶ。三角屋根のレンジャー達の家を作り始めるが，途中からCは立って腰に手をやり，Th にはやくつくるようにいう。よくしゃべる。レンジャー達を家の中にたたせる。おやつを食べてからも遊び，なかなか帰らずまた明日くるという。Cの大事な人形は箱に片付ける。

第24回　母子プレイの続きで，ライダー，飛行機を埋める。弟がいじると怒って砂をかける。Th と大きなスコップで砂をどけ，水を入れ海をつくる。泥々になって自分ですすんで作っていく。側にいる弟におだんごを作ってあげる。象の家族を水につける。桶に水を入れ，怪獣，ライダー，動物をみんな水につけ〝ミンナミンナオトモダチ〟。ライダーを水から出し Thf の怪獣と戦わせる。水をいれかえ，レンジャー，ライダーを洗う。Thf と鉄琴をたたく。オニーチャン以外吃らない。

第25回　母子プレイの続きで，死んで砂の中に埋めたレンジャー達を砂場にたてる。Thf がCが砂場へもってきた飛行機を走らせると〝ウルサイ！ダマッテロ〟。砂場で山をつくり，頂上にカメンライダーをたて，まわりの平原にレンジャー達を並べる。弟がライダーをいじると怒る。弟が邪魔をするので頭が痛くなるという。弟をたたき，泣くと〝ヤッタ！〟。弟が倒れると〝シッカリシロヨ〟と兄らしい態度もみせる。犬，パンダを抱いて，犬に名前をつけて，ごはんをあげて Th と遊ぶ。ライダーが座る椅子やテーブルを作りはじめるが，途中で頭が痛い，とトランポリンへ行く。Th が行くと今度

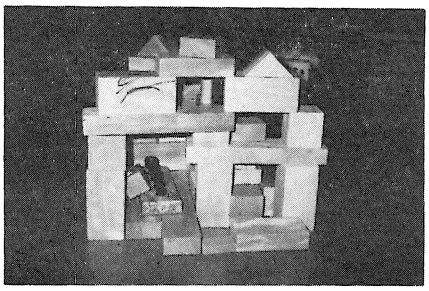

図2　第28回　　家

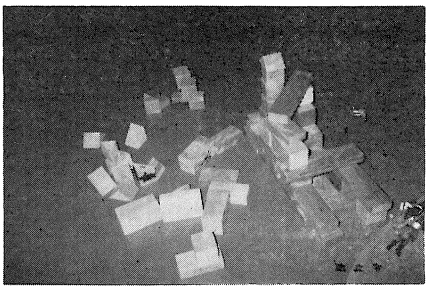

図3　第29回　　完成しない家

はお腹が痛い。そのあとパトカー，飛行機を走らせる。ＰＲの空間を自由に使い柔軟になってきた。吃音はなかった。

第26回　母子プレイの続きでツミキで家をつくる。Th が〝すばらしいお家ができたね。お城みたいね〟というとCは〝スゴイオウチデショ，リッパデショ〟と自分の投影とも思われる大きい屋敷ができたことを喜ぶ。弟が近づくと制止する。パンダの人形を持ちCは女の子のお父さん，Th は男の子のお母さんになり正月の話などする。トラックにCが乗り，Th が乳母車にパンダと犬を乗せてＰＲを動く。パンダの上にのり長い間キスをしている。ライダー，レンジャーを弟がいじっても怒らない。弟を怪獣にしてCがカメンライダーになり退治する。守るものがいらなくなりC自身が強くなった。砂場で犬，パンダと一緒にごはんをたべる。ゆったりしてきた。

第27回　砂で牛乳をつくる。砂の中にごみが一杯あっていけんと Th に文句をいう。Th が箒を持ってきて何故ごみが入るか説明すると納得。砂場に水をまき，熊手を何回も洗う。砂場にライダーを並べ，クレーン車をまん中に置き，砂をすくいバケツにいれる。Th は側でみている。Cは一人で遊ぶ。おもしろそうでない。プレイをはやめに切りあげ，母親，母親担当者も一緒におやつを食べる。

第28回　母子プレイの続きで家をつくる（図2）。母子プレイでは弟にこわされてもまた新しいのをつくる。机で Thm と一緒にレンジャー達に食事をさせる。弟がライダーを持っても怒らない。バケツに水をいれ，野菜，レンジャーを洗う。口にいろいろの食物をいれ，カニの角が口にあたると痛いと Th に甘える。レンジャーの手がはずれているので，Cは洗って Th になおしてもらう。タイヤを洗い，トラックに乗り，Th に赤ちゃん人形の入った乳母車をひかせる。後をふり返り〝トオレル？〟とCは Th を気づかう。ピアノの前を車庫にしトラックをしまう。おやつの時，Th が頼むと机を出すのを手伝ったり，弟を手を洗いに連れて行く。Th が弟が家で何をしているか尋ねると〝Rチャンオトーサンイラン〟と弟を通し，父へのネガティブな感情を表現する。

時期尚早とも思われるが，Cの自我を象徴する家をつくり，弟にこわされても新しい家をつくったり，自分を守るものがいらなくなり，吃音も減少し，自我も強化されてきたので一応終結とした。

再開Ⅰ（第29回―第42回）

３週間後，母親から幼稚園入園のことで相談したい旨電話があった。第28回プレイ終了１週間後，Cと弟は自家中毒，肺炎で入院した。Cだけ先に退院し，母の実家にいたが，吃音がひどくなり，こんな状態で幼稚園申し込みをしていいか相談したいとのことだった。

第29回　再来したCは赤ちゃんぽく弱々しい。砂場でカメンライダーの歌をうたいながら，ライダー，レンジャーに砂をかける。床に砂がおちていて，Th に掃除をするようにいう。家をツミキでつくるが完成しない（図3）。Cがトラックに乗り，Th は赤ちゃん人形の入った乳母車をひいてCの後を行く。人形のなき声がすると〝Cクンノアカチャン，Cクンアカチャンホシイ〟と抱いて寝かせたり，一緒にお風呂に入ったり，しぐさが非常に乳児的でC自身が赤ちゃんになっている。トランポリンを Th と対角線の位置でやる。Th が近づくと逃げる。おもらしをしていた。吃音はプレイ中はなかった。

第30回　乳母車に大小のパンダをいれる。トラックにのりCはお散歩。Th は乳母車をCのあとを押す。赤ちゃんパンダに顔をすりよせる。レンジャーを弟にわたす。床におちていたカンガールをかわいらしそうにみる。Thy とも自由に話をし，のびのび動く。砂場の真中に立ち〝ハハハ〟と口を大きくあけ野菜等食べる。Cが御飯をつくり Th が象になり，食べる。〝ゴハンダ，ゴハンダ〟といろいろな動物を箱から出してきて食べさせる。同種類の動物は同じ所へ口を砂につけて並べてい

図4　第30回　　動物達にごはんを食べさせる

く。途中でトイレへ一人で行く。Cはしゃべらずエネルギッシュに並べる（図4）。時間がきてもやめない。父母も面接を終り入室し，手伝って終りにした。おやつの時，父母弟に気をつかいお菓子をあげて，Cは少ししか食べない。

第31回　表情がさえず気むずかしい感じで動かない。吃音もめだつ。母子プレイの続きで床にすわりプラスチックツミキでだまって家をつくる。Th がツミキをみて〝お花が〟というと，Cは〝オハナジャナイヨ，オカーサンガセッカクツクッタノニ〟という。弟達が隣で遊んでいるがみない。疲れたといって，立ち上り，兎のTVをみる。ライダーをかかえこみ一人トランポリンに乗り，Thf，弟と戦う。トランポリンをとんでいる時，Th も一緒にとぶといやがる。

第32回　非常に元気がよい。ライダー，レンジャー，怪獣，自動車，飛行機を〝ネテラッシャイ〟と埋める。〝ハイオキテ〟と怪獣以外出す。木を砂場に植えて「春が来た」の歌をうたう。〝ハルガキタッテイイナー〟と春が来たことを喜ぶ。Cにも春が来たかんじ。Th が春がきたの歌をピアノでひくと〝モウイイ。ウルサイヨ〟。怪獣も出して皆にごはんをあげる，Cは支配的な言葉と甘えた言葉の両方を使う。〝オヨギタイナー〟と砂を掘り，砂場に海を作り始める。大きいスコップで砂を砂場の外に放り出す。Th が驚くと〝イイ？〟ときいて力強く一人で掘っていく。Th に〝オミズ，オミズ〟と命令する。海の中にハチュウ類をいれる。時間がきたことを何度も告げるがやめない。終了のレコードがなると〝ウルサイ！モットイイオンガクカケロ〟。今回は春からいっぺんに夏がきた。そして制限，枠をこえた。おやつの時母にトランポリンをするのをみせる。

第33回　砂場で魚つり。釣った魚を Thf，パンダ，犬に歌をうたいながらあげにいき，皆がおいしそうに食べると満足そう。犬にあげる時は〝タマニワネ〟と威張っている。弟がライダーを持っていても怒らない。トンカチを持ちツミキを長く並べていく。弟がいじるとツミキをかかえこむ。疲れたといって木のツミキではつくれなくなり，プラスチックツミキで家をつくる。箱によりかかりCは疲れた様子。Th が励ますと立って体操し再びつくる。カラフルなきれいな家をつくった。弟達は途中から外へ散歩にいくが，いない方がCはのびのびする。絵本をみながらCのつくった歌を Thf のピアノにあわせ歌う，PRを自由に動いている。

第34回　ライダーを弟がいじると怒る。大きいスコップで力強く砂を掘る。弟がCに砂をかけると仕返しをする。Cは監督で，Th にライダー，怪獣を埋めさせる。棚から輪なげの輪をだしてきて床をころがす。Cはスベリ台に登り〝オレニヤラセロ，オレジョウズナンダ〟と言いながら得意そうにやる。Th，弟も一緒にやる。弟は自分の作業を邪魔し目ざわりだが兄というところで我慢している。Th はCの言うことを全面的に聞いてくれる人だと思い，ためらいがなくなった。おやつの時CがピアノをひきCのピアノにあわせ Th 達が歌う。

第35回　幼稚園に入園。吃音がひどいがよくしゃべる。非常に支配的。スコップで怪獣，ライダーを埋める。Th が手を出すと〝オマエワヤランノ〟。〝アンタセンセダロー〟と言うので，幼稚園に行って先生がいたでしょうと言うと先生は皆やさしいから大好きという。ライダーを出して Th に洗うように命令したり，スコップで掘るように指示する。ライダー，レンジャーをお風呂に入れる。一人でライダー達の家をつくる。Th はみている。Th が〝ライダーは家がないから寒いって〟というとCは〝ソレワイケマセンネー〟と大人のようないい方をする。〝オオキイッテイインダヨ〟と大きい家を造る。バケツからライダー達をとりだし，拭き，家の中に手をあげてたたせる（図5）。プレイ終了のレコードがいつもと違うと〝オレイッテクル〟とPRの外へ出ていく。Cのピアノにあわせ Th 達がおやつの歌をうたう。Th に〝ウタ！ウタ！〟といつものピアノをひかせそれにあわせトランポリンをしているのを母にみせる。

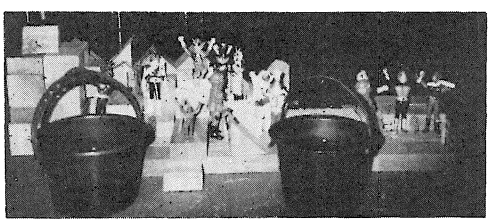

図5　第35回　　ライダー達の家

第36回　PRの空間全部を使って力強く野球をする。ライダーは全く関係ない。Th が投げてCがうつ。構え

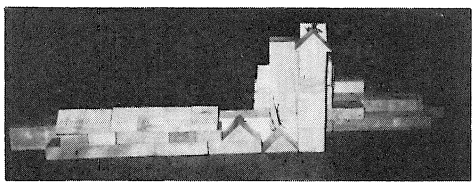

図6　第36回　　マーケット

がしっかりしていてよくあたる。Cは広島カープ。Thは阪神タイガース。打つ位置，投げる位置をいろいろ変える。時々鏡に映る自分の姿をみている。ボールがあたっても痛くない，大丈夫。Thがうってあたらないと〝ダメ！ダメ！〟。トランポリンを力強くする。Thに〝ミテテ〟といって積木でマーケットをつくる（図6）。Cのピアノにあわせおやつの歌をうたう。食べながら幼稚園や家の話をする。ThはCへ気をつかわないで遊べるようになった。

第37回　野球，顔つきがしっかりしてきた。うつだけでボールはとりにいかない。Thyともする。Cはジャイアンツの背番号2。Thが応援すると〝ガンバルヨ，マケルモンカ，センセーニワ〟。Thyがいろいろな球を投げると〝ヤイヤイ！ヘンカキュウワイケン〟とバットをトランポリンに打ちつける。Cだけ，パンダを持ってトランポリンの上にのり，他は下へ降りてままごとをする。Thyのもつ赤ん坊人形にいろいろ食べさせる。おやつにしようといってもなかなかやめない。手を洗いながら春が来たの歌をうたっている。Cのピアノにあわせおやつの歌。母親が入室してきても，また遊びだし，なかなか帰らない。

第38回　野球。今日はCは阪神。うつと〝ドンナモンダイ〟。〝ヤメ〟といって次の遊びを捜す。弟とThyがピストルで戦っているのをみて，Cもラッパやツミキをピストルにしてうつ。弟と2人で戦う。〝オマエキッテシマウゾ，バーン〟，弟も〝バーン〟。自転車に乗り，PRを走り，輪なげの棒にあて砂場に乗りあげる。砂場でケーキをつくる。Thは誕生日のケーキと思いCと一緒に作っていたがCにとってはウルトラマンの家だった。輪なげの輪を道におき，ウルトラマンの歌をうたいながら小さいゴムのウルトラマン人形をおいていく。

第39回　普通に遊びに来ているかんじ。トラックに砂をいれ，PRをまわり砂場へ戻る。Thが砂をいれようとすると〝アンタワイイノ〟。プールに空気をいれる。Cが先にやり次にThがやる。Thが手で空気入れを押すと足がいいと教えてくれる。Thyをよび Cを運ぶ。行き先は学校，東京タワー，自分の幼稚園，お空，海。楽しそう。Thに鉄棒をやってみせる。Thyに自転車を出してもらう時〝ダイジョーブ？〟と気づかう。Thyとピストルのうちあい。Thyの手に輪なげの輪をはめ手錠にする。ThyとTV番組の日常的な話をする。セラピイも終りに近づいたので片つけをするようにCにいうがしない。

第40回　黒板に兎の家族が手をつないでいる絵をかく。Cの家族を象徴しているよう。スベリ台をうつ伏せですべったり，遠くから走ってきて坂を登ったり，マットでカエルとびをしたり力強い。Thのピアノにあわせ，支えなしでトランポリンをする。赤ん坊パンダを救急車にいれ病気をなおし父母パンダと一緒にごはんを食べる。Thと電話で家や幼稚園の話をする。Thが質問してCが答える時吃るがよくしゃべる。おやつの時，Thが机を持てないと言うと〝オレワチカラモチダ，ハコブゾ〟と手伝う。自信がついて本当の力になっている。Cが自分でピアノをひきドレミの歌をうたうが〝ドーワドーナツノド，ウンチウンチ，オシッコ……〟というように友達と遊ぶようなことをいう。場面によっては吃音もあるが，自信がついて非常に強くなってきたので2週間間隔をあけ，様子をみることにする。

第41回　水痘のため1カ月後に来室。新しい玩具が入っていて目移りする。ボーリングで〝フタリデアタッテゴッツンコショウ〟とCがいう。ぶつかる前にThはけってとまってしまう。次に野球。すごい構えで，ボーリングのピンも一緒にうつ。スベリ台の上で〝トントントンウンチチャン……〟と歌う。棚のカスタネットをみて幼稚園にもあるという。プレイ場面が現実場面と同じになっている。レールをつなげ汽車を走らせる。Thがリードしすぎて Cは今日はこれで終りにしようという。そのあとThが魚になりCが釣っておやつにする。

第42回　Thが入室すると〝ナニ！ナニ！ナニ！〟。お母さんとサヨナラしていいか聞くと〝キコエナイ〟。最終回なので検査をしようとしたが〝シナイ，オレワチンチノウンチノコドモ〟等をいって反抗する。Thがマイクをもって歌うと〝オレモシタイ〟といってコトバのテスト絵本とK式乳幼児発達検査の一部をする。絵をみて名前をいう時は全く吃音はない。構音は〔正，t/k〕，〔d/g〕〔正，t/s〕，〔dzj/dz〕，〔正，tʃ/ts〕〔s/ʃ〕，〔dzj/gj〕〔tʃ/kj〕〔dzj/z〕で，初診時にくらべ，〔s〕〔k〕〔ts〕が一部正構音になり，〔ʃ〕が〔s〕の代置になっている。カ行，ガ行がタ行，ダ行になり，4才としては，構音が未発達といえる。K式乳幼児発達検査は一部しか実施できなかったがほぼ生活年令の発達水準にあると思われる。

再開Ⅱ（第43回―第53回）

第42回プレイ終了後2カ月して Th の方から電話でその後の様子を聞くと家族内のごたごたがあり，父母ともにCにあたり，Cは発熱し，また吃音もでている。C自身が大学に行きたがっているが先生は夏休みでいないといってあるとのこと。

第43回　髪が伸び，やみあがりの感じで野球のユニフォームを着ているが，力強さがない。入室しすぐにレンジャー，ライダーをだす。遊びを次々かえた後，レンジャー，ライダーを砂場の真中にたてる。砂場の砂を掘り小さい池をつくる。Th の誘導で大きな海にする。Cは元気になり，Th に命令し水を運ばせる。いままでたまっていたものをカタルシスしている。

第44回　粘土をまるめたり，切ったりする。棚からライダーをだし名前を小さい声で Th にいう。大きいスコップで砂をすくい，Th とCが反対側から掘り，砂場の中央に道を作る。次に淵に沿い道をつくる。山になったところにトンネルを掘る。〝先生はいいの〟といって一人でやり力強い。時々甘えた声，しぐさをする。

第45回　顔つきがしっかりしてきた。机でTh とむかいあい粘土で魚や野菜を作る。ゆったりして自然でおだやか。

第46回　はじめ風邪気味で表情が暗かったが，途中から元気になり Th に支配的，トランポリン，鉄棒を Th にしてみせるが，2度落ち，無理しているかんじ。砂場の砂を放り出し，砂場全体をつかい海，山の形をしたルパンの飛行機をつくる。飛行機の下にトンネルを作り貫通すると大喜び。

第47回　元気で威張っている。母子 play のつづきで，ツミキでトンネルをつくり，上を駐車場にしミニカーをのせる。駐車場から道を作り，長く線路をつなげ，橋や駅も，一人ですべてつくる。その後，スベリ台，鉄棒をやり元気がよい。マットにパンダやぬいぐるみの人形を乳母車で運び，寝たり風呂に入れたりする。泥棒よけのピストルをもっている。柔かい弱い面と強い面がある。

第48回　母との遊びで2つ山を作り，各々にトンネルを掘る。Th が入室すると母と遊びたがる。しばらく，プラスチックツミキでロボットを作ったりして母と遊ぶ。鼻歌をうたい御機嫌。Th が入室すると Th に対し反抗的。足で山をける。Th との遊びはツミキや粘土でのロボットつくり。強さを誇示し，キンキンして威張っている。幼稚園の友人のことを話す時は表情がやわらぐ。

第49回　黒板に大きな鯨を描いて，鯨が魚をのみこみその魚から赤ちゃんが生まれる絵をかいて Th に説明する。砂場で海をつくる。怪獣と怪人をたたかわせる。怪人が強い。怪人を山の中に埋めて，山からだし怪獣をやっつける。弟，Thyの遊びに加わり，Cは〝ウルトラマンエース〟になり3人をやっつける。Cをうっても大丈夫。サポートしないでも強い。普通に遊びにきているかんじ。

第50回　Th と相撲をとる。ツミキ全部をつかい長い立派な飛行機の家を作る。飛行機は宇宙へ行く。粘土でキノコ，卵，ヘビを作る。タブー語をいう。

第51回　幼稚園の制服を着てくる。砂場一杯に木や草を植え動物をならべる。動物が草を食べているのどかな放牧風景。Th に命令し，動物をあつめさせる。象とカンガルーの親子が特にCはすき。スベリ台を弟と仲良くやり元気がよい。Th がプレーの終了の時刻を告げるとツミキをけり，〝イジイジイジイジワルバアサン〟とTVのように節をつけていう。

第52回　前回から1カ月後来室。トランポリン，スベリ台，鉄棒をする。粘土，砂をスベリ台から放りなげ，〝カメンライダースーパーワン〟etc と大きな声をはり

表2　遊戯治療場面での吃音の状態

期	回	吃音	期	回	吃音	期	回	吃音
I（導入期）	1	＋	IV期前半（創造と再構成期Ⅰ）	22	＋	VI（創造と再構成期Ⅱ）	43	＋－
	2	＋		23	＋－		44	＋
	3	＋		24	＋－		45	－
	4	＋＋		25	－		46	＋－
II（抵抗期）	5	＋		26	－		47	＋－
	6	＋		27	－		48	＋－
	7	不明		28	＋－		49	＋－
	8		IV期後半	29	－		50	＋－
	9			30	－	（離反期Ⅱ）	51	＋－
III（甘えと攻撃期）	10	＋＋		31	＋		52	－
	11	＋＋		32	＋		53	－
	12	＋		33	＋			
	13	＋		34	－			
	14	＋		35	＋＋			
	15	＋＋	V（離反期Ⅰ）	36	＋			
	16	＋		37	－			
	17	＋		38	＋－			
	18	休み		39	＋－			
	19	＋－		40	＋			
	20	＋－		41	－			
	21	＋		42	－			

第7－9回は発語が少なく不明。＋＋よく吃る　＋時々吃る　＋－少し（3回以内）吃る　－吃らない

あげ，演技する。乱暴で時々タブー語をいう。遊びやTh との関係が現実的で日常的なかんじ。

第53回　前回より2カ月後に来室。幼稚園でお別れ会があったこと，朝にお祈りをすることなど幼稚園の様子を話す。大学ではどうか Th に尋ねる。砂場で大きな山と海をつくる。

以上が各回の遊戯治療の概要である。治療場面における吃音の状態を，よく吃る（＋＋），時々吃る（＋），少し吃る（3回以内）（＋－），吃らない（－）であらわし表2に示した。第7～9回は発語が少なく不明である。第25回，第42回でのコトバのテスト絵本による絵カードへの反応では，吃音は全くなかった。第43回以降の再開Ⅱでは少し吃っただけだった。第45，52，53回はプレイ場面では吃音はなかった。

V 考　　察

吃音症状は，さきに述べたように遺伝的要因と環境的要因の両方が関係して発症すると考えられる。本症例においても，父方祖母，いとこに吃音があり遺伝的なものと家族関係を中心とした情緒的，環境的圧力により発症したと推察できる。

本症例の家族環境及び問題発症の背景については，大西・小椋（1982）に詳述した。父親は職業がら非常に神経質で，子どもに対して口やかましく怒る。自分の父親と幼少時に生別し，一人っ子で祖母に甘やかされて育ち，父親イメージを持っておらず，父親，夫としての役割がとれていないところがある。母親は，夫の性格，夫の子どもへの態度等への非難が強い。自分の実家に依存しており，殆ど毎日二人の子どもを連れて実家へ行く。母方祖母（自分の母）はしっかりしており，母親はこの祖母を尊敬し，たよっている。母親は子どもっぽく未成熟で，Y－G性格検査では，思考的外向，主観的，攻撃性，支配性が強い。毎回設定した母子プレイでは，治療初期では子どもと一緒に遊ぶことがなく傍観していることが多く，また他の母子とのかかわりもなく閉鎖的であった。

本児の生育史をみると，母親は本児出産までに2度流産し，Cの時も流産のおそれや妊娠中毒症のため，入院や実家での静養でやっと出産した。出産後はうつ状態になり3カ月位外へ出れなかった。育児への不安が強くC自身をこわれものを扱うように気をつかって育てたという。C出産後2度妊娠したので（1度は妊娠6カ月で流産），入院や流産のおそれのためCを抱けなかった。Cが2才4カ月の時，弟が誕生した。Cの世話は主に実家の祖母が行っていた。

以上のようなCの生育環境から考えると，Cが乳児期に安定した，安心した環境の中で十分に甘えさせてもらった経験が少いことが推察できる。一方，長男で親からの期待を受け，お兄ちゃんとしての地位を与えられ，無理な頑張りがあった。Cは自分のことを〝オニオニオニーチャン〟とよく吃る。神山（1967）は，話し手の内部抗争に関係した単語で吃音が起るとの説があることを紹介しているが，兄としての地位が本児にとり負担であることも推察される。さきにも述べたように，父親は口やかましく怒り，C自身非常に父へ気をつかい恐れている。母方の祖母もよく怒る。近親者に吃音があり，素質的基盤にくわえ，家庭内での緊張や葛藤など情緒的及び環境的圧力が本児の吃音を発症せしめたものと考えられる。吃音発症は，弟誕生後4カ月の2才8カ月の時である。松岡（1965）がのべているように，妊娠，出産により今までの保護的扱いから親の突き放し，兄姉扱い，高い要求水準と自立への要求，圧力など親の態度，環境の変化が直接の発症の契機と考えられる。本児がよく自家中毒にかかること，夜尿，遺尿があること，再発は，実家にあずけられた緊張，不安な状態で，また家族内のトラブルで生じたことは，Cの吃音に心理的原因が多大に関係していることを推察させる。

ここで本児の治療過程をふり返り，どのような過程をへて変化，成長していったかを検討する。

遊戯治療の過程における子どもの行動変容のとらえ方は各治療者のとる立場，理論により異る。掘（1962）は，導入期→開発期→創造期→離脱期という段階を設定している。深谷（1974）は，模索期→行動化期→攻撃性拡大期→創造と再構成期→離反期という一般的モデルを提出している。本児の治療過程を，これらの研究を参考に次のようにわけた。

Ⅰ期　導入期　第1回―第4回
Ⅱ期　抵抗期　第5回―第9回
Ⅲ期　甘えと攻撃期　第10回―第21回
Ⅳ期　創造と再構成期（Ⅰ）前半　第22回―第28回
　　後半　第29回―第35回
Ⅴ期　離反期（Ⅰ）　第36回―第42回
Ⅵ期　創造と再構成期（Ⅱ），及び離反期（Ⅱ）
　　第43回―第53回

再発したⅥ期を除いて考えるとⅡ期の抵抗期以外は，ほぼ深谷のモデルに一致している。深谷の行動化期は，場の理解が確立し，防衛的態度もゆるみ，Th との関係ができはじめ，それに支えられ行動が自由さを増し，自己表現も可能になる時期である。治療場面へのポジティ

ブな感情の高まりを示しているが，本児の場合，集団の中で傷つけられ，動けなくなり，治療へネガティブな感情を持ち抵抗を示した時期である。集団の中での1対1のかかわりを重視したが，個人療法のようにはセラピストとの関係は深まらず，本児の場合，他児の存在により競争心が刺激され，混乱を大きくしたともいえる。深谷（1974）が集団療法に適さない子どもとして競争心の強い子どもをあげているが，本児の場合はじめから個人療法ですすめたなら，もっと短期間で治療が終結したことも予想される。

第Ⅰ期は，自己主張が強く，他児とはりあい，ことごとく〝オニーチャンモ〟と主張した。第2回のプールの遊びで，最初の行き先が東大で，次が島大であったことは，本児が家族から言われていることであり，本児への家族の期待の大きさと権威的なものへの志向を感じさせた。本児自身，家族の期待をとりこみ，無理な頑張りがある。しかしシーソーがこわかったりの弱い面があり，内面の弱さを防衛した自己主張の強さであると予想した。Cの遊びに従い，支配欲求，優越欲求を満足させた。

第Ⅱ期は，頑張っていたが，他児にやられ，痛さと，くやしさから床にひれ伏してないた。これをきっかけに一挙に弱さが露呈し，PRからの一時退出やおもらしがあった。他児との関係をさけ，プレイ場面がおもしろくなく，治療場面への抵抗を示した。ねころがったりの弱い面と攻撃性がではじめた。Cの弱い，動かない状態をサポートした。

第Ⅲ期はPRへ入室するのがスムースにいかなくなり攻撃行動と甘えの両面がみられた。PRでの甘えの行動とは，ぬいぐるみ，ライダーなどCの愛着の対象となった物をかわいがり，ごはんを食べさせたり，お風呂にいれたりする世話する行動が主である。Cの愛着の対象はCの投影でもあり，自分もそうしてもらいたい，シンボリックな形での愛情欲求の表現であり，甘えの行動と考えられる。家では弟と同じように這這したり，抱っこを要求したり，「お兄ちゃん大好き？」と母に愛情の確認を求めた。母は，あまりしつこいので大嫌いということもあるというように，Cの甘えの欲求を全面的には受けとめてやらなかった。PRでも他児がいて思うように動けず，Cのいらだちはひどく，自分の気にくわないことがあると大きな声で叫び，競争心，支配欲求の強い自分自身をさらけだした。第14回で，部屋中のものを食べてまわる口唇レベルの行動を示したが，PR全体のものを自分の中へとりこみたい支配欲求であり，それが現実にはできない攻撃の表現であるとも思われる。最初攻撃行動は，カメンライダー，ウルトラマン，ゴレンジャーの人形をもって怪獣や動物をやっつけるシンボリックな表現であったが，エスカレートし，他児が自分と同じように家をつくっているのをみて，他児の家をこわしたり，ツミキを投げつけたり，他児が遊んでいるものをけったり，他児が楽しそうに笑うと〝ウルサイ〟とどなった。この時期では，レンジャー，カメンライダーの強い人形はCを守る大事なものであり，自分の分身のようであり，他児がさわるとハサミで威嚇して怒った。Cの攻撃に対しては，他児の身体に直接ツミキを投げつけようとした時だけ他児担当の Th が禁止した以外は，禁止しなかった。C専任の Th が，他児とかかわらずCの攻撃性や甘えの欲求を受けとめることにつとめたが，集団場面であり，Cの独占欲はみたされなかった。

攻撃性は Horney（Levy, N. J et al, 1977による）によれば，自己主張の一種であり，自己と人生に対するポジティブな建設的態度であり，成長していくための一つのエネルギーである。また Adler（対馬，1977による）は優越欲ないし征服欲の欲求阻害から攻撃がひきだされるとしている。Storr 高橋訳（1973）も人間性の攻撃部分は，知的な仕事をなしとげる基礎であり，独立を達成する基礎であり，また人間がその仲間の中にあって己れを持するために必要な自尊心の基礎でさえもあるとされている。このような点から，遊戯治療過程にあらわれる攻撃性は成長へのエネルギーの積極的意味をもつと考えられる。

精神分析学的には，吃音は意識下の欲求に深く根ざした神経症状であると考えられている。吃音行動によって満足される特殊な欲求に関しては，精神分析家により一致していないが，その1つに次のような説がある（神山，1967）。吃音行動は乳児期の口唇性欲の充足に対する欲求を満足させる。乳児期に満足させてしまうような乳を飲むこと，咬むことといった口が他の物と合わさるという未熟な性的快感が吃るということに無意識のうちに永続されている。このような精神分析学的観点を考えると，本児の吃音症状は乳児期（口唇期）に固着し，母親から十分に甘えの欲求を満たされなかったこと，安定した家族関係の中で，乳児期に獲得すべき基本的信頼感を十分に体験できなかったことに起因していると推察させる。土居（福島，1973による）は，口唇期における母との基本的信頼体験が欠如していると，依存性と攻撃性が一見あたかも無関係のように同時にあらわれることを述べている。本児の場合，この第Ⅲ期に，攻撃性とシンボリックな形での依存性が同時にあらわれているが，土居の考えからも，本児の口唇期に問題があったことが予想できる。

第Ⅳ期は，第1回終結となった第28回までの前半と第29回から35回の後半までの2つにわけて考える。

前半は，他児とのはりあい，競争もなく，Th はCに全面的にかかわった。Ⅲ期にはげしかった攻撃は弟に対してわずかにあるだけとなり，甘えもパンダをつかっての遊びにわずかにみられるだけとなった。第22回での動物を，ライダーが守る山とは反対の右方向へむけて並べたのを機にCのエネルギーは動きだした。自分から砂場や，ツミキで創造活動をした。ライダー，レンジャーもⅢ期のように攻撃でなく自分自身の強さを誇示するのに使われた。弟がいじっても，第26回からは怒らなくなり，自分がライダーになり，弟を怪獣にして退治した。本児自身が強くなり，守るものがいらなくなった。第24回では，怪獣もライダーもレンジャーの人形も象もいれて，〝みんなお友達〟といって親和性を示した。第26回，第28回では，木のツミキでCの自我の形成を象徴する家の建造を行った。吃音症状もみられなくなったので終結とした。しかし1週間もたたないうちに自家中毒，肺炎になり，退院後，弟も入院のため実家にあずけられたのを機に吃音もひどくなり来室した。イメージとしては自我の形成を示す家もできたが，他家での緊張，圧力，不安に耐えるには脆く，もう少しケアーが必要だった。再開後は木のツミキで家をつくりかけるが完成しなかったり，プラスチックツミキで家をつくったりして，Cの自我の弱化が示されていた。再びパンダを世話する乳児的行動と，ライダー，レンジャーをつかって弟や弟担当者と戦った。第30回では，すべての動物を砂場に口をつけて並べ，貪欲な口唇レベルの欲求を示した。再開後3回は，逆戻りしてⅢ期に近い行動を示した。第32回から非常に元気がよく，砂場の枠から砂を放り出し，時間がきても遊びをやめなかった。いままで〜してはいけないと父母から言われ，自分でも自分をしばりつけ無理していたが，この枠を破ることはCの自我が柔軟になる第1歩とも考えられる。箱庭療法で，子供が箱庭の中に何かを埋めて，それを取り出したり，土の中から何かが出てくる表現を行なうことは再生の主題をあらわしていることが河合（1969）により指摘されている。本児もⅣ期前半より埋めて，出してくるテーマをくり返し行った。第32回では，ライダー，怪獣，飛行機を埋め，春がきたの歌をうたいながら埋めてきたものをだしてきて皆に御飯をあげた再生のテーマを表現した。春の訪れを喜び，本児自身にも春がきたことが示されている。第35回では，埋めて，だしてきたライダー達を洗い，彼らの住む大きい家を作ってあげた。本児の分身であったライダー達も，本児が強くなり，守らなくてよくなり，家に落ち着いた。Winnicott 橋本訳（1979）は，幼児が不安，特に抑うつ不安に対する防衛として，毛布，人形，軟かい玩具，かたい玩具等を使用することを指摘した。母親と融合している状態から母親の外部にあり独立したものとして存在する状態への移行の際，用いられるとして移行対象とよんだ。本児がⅢ期から使用した，ライダー，ゴレンジャー，ウルトラマンは発達的にみれば移行対象より，より高次なものであるが，不安を防衛し，自分を守り，自我の補強に役だち，子どもが自我の一部として所有する点において類似の性質を持っていると考えられる。本児の自我が強化された時，それらは必要なくなり第35回のライダー達の家の建造以降第42回までは使用されなかった。再開Ⅱの第43，44回では再び使用され，これらの玩具がCの弱い自我をサポートしているといえる。

Th に対しては，自分のことを全面的に聞いてくれる人だとの信頼感をもち，非常に支配的で，Cの指示のもとに Th を動かした。おやつの時は，Cがピアノをひき，それにあわせ Th 達が歌った。一人で何事もやりたがり，遊ぶ空間も広がり，PRを自由に使い動いた。

第Ⅴ期は幼稚園に入園し顔つきもしっかりしてきた。第36回でツミキでマーケットを作り，Cの世界が広がってきたことが示されていた。PRの空間全部を使い，野球をしたり，トランポリン，マット，鉄棒など体全体を動かして遊んだ。ライダー，レンジャーの遊びは全くしなかった。弟担当の Th とも自由に遊び，話をした。第39回には，第2回でやったプールの遊びをしたが，行き先は学校，東京タワー，自分の幼稚園，お空と，子どもらしい行き先であった。第40回にはCの家族を象徴する，うさぎの家族が手をつないでいるなごやかな絵を黒板にかいた。幼稚園でやったこと，友達のことも話し，幼稚園によろこんでいっているのが Th にもよくわかった。友達の間で話すタブー語を Th にもいい，現実場面と，PRが同じになってきた。本児自身，第40回のあと，家で，ぼくには幼稚園が2つあるといっており，治療場面がCにとり必要なくなり終結とした。

しかし，嫁一姑問題，夫婦間の問題でトラブルがおこり，家庭内は険悪となり，父母はCにあたり，Cは発熱したり，吃音がでて再開した。この再開Ⅱの第Ⅵ期は，第43回から第50回までが第Ⅳ期の創造と再構成期のくり返しで，第51回から第53回までは離反期のくりかえしである。創造と再構成期（Ⅱ）は，砂を砂場の外に放り出し海や山をつくり，山の中にトンネルをつくった。またツミキでトンネルをつくり，線路を長くつないだ。トンネルはブロックされていた感情が貫通し，Cの中に道が

できたことが示されているのではないだろうか。第46回，50回では砂やツミキで飛行機をつくった。Cの飛躍の欲求が表現されている。第49回では鯨が魚をのみこみ，その魚から赤ちゃんが生まれる誕生の絵をかいた。第50回では，粘土で黄色の卵をつくった。小椋・吉田（1972）は，絵画療法の治療過程で，青年期のクライエント達が過去の囚われた自己を自らの手で殺し，より成熟した自己へ誕生していく姿が，〝死〟と〝誕生〟のモチーフとして描画に表現され，これを機に治癒にむかうことを報告した。本例においてもCの新しい感情の体験がこの誕生の描画に象徴的に表現され，自我の安定がとり戻せたことが推察できる。第51回以降は，来室の間隔が1～2カ月とあき，治療へのモチベーションもさがり，この場面を必要としなくなってきた。プレイ場面では幼稚園のはなしをしたり，タブー語をいったり，現実場面とかわらなくなった。幼稚園での生活が楽しく，友人もでき，夕方までその友人と遊び，外界にも適応している。

弱さも，攻撃も，甘えも，支配的行動も1つづつセラピストにうけとめてもらい，弱さを防衛した無理ながんばりのある堅い表情の子どもからのびのびとした自信に満ちた強さをもった子どもになった。

吃音の状態は，家庭，母子プレイ，セラピストとの治療場面で違っていた。ここでは治療場面の吃音についてだけふれ，表2に示した。第Ⅲ期の甘えと攻撃期に一番激しく，第Ⅳ期前半の家の建造の時期には殆どなかった。第23，24回ではオニーチャンを吃っただけだった。第Ⅳ期後半では，幼稚園入園の前後で吃音があった。幼稚園入園後はじめての来室の第35回では特に激しかった。第Ⅴ期では減少している。第38回，第39回では，わずかにあり，第40回では電話でThの質問に答える場面で吃音があった。再開Ⅱの第43回以降は，少し吃音があったが第52回，53回はなかった。支配欲求がつよく他児と競争した第Ⅲ期や，幼稚園入園後の緊張，圧迫感の状態で吃音が激しかった。自我が強化され安定した時期では吃音は減少している。遠藤（1981）は吃音児の治療は，いくらか吃音が残る状態で終結することを報告している。終結後5カ月の時点では吃音は全くなく，吃音があったことを忘れるほどであると母親は報告している。

本児の遊戯治療は，2度も終結，再開をくり返し，1年10カ月もの長期間を要した。ここで長期間を要した原因について考えてみる。第1は，さきにのべたが，20回までは集団遊戯療法で行ったため，本児の優越欲求，支配欲求，愛情欲求を十分にみたすことができず，他児への攻撃，競争心を増大させ，本児をかえって混乱させたことによっている。また弟の同室により，本児の気持を十分に解放させることができなかったことも一因していると考えられる。もっと治療状況を整備し，個人療法で最初実施する必要があった。第2は，本児をとりまく家族環境が安定したものになるのに時間がかかった。本児の自我が遊戯療法により強化されても，家庭で本児への配慮がなされず，自我は弱化し，吃音は再発した。子どもへの治療では，子どもへのアプローチ以上に，母親を中心とした家族へのアプローチが重要である。これについては，大西・小椋（1982）に報告した。

治療は，子どもとセラピストの相互作用の中で進行するものである。子どもの遊びは，セラピストの治療的立場，パーソナリティが非常に関与している。セラピストの内部での子どもについてのいろいろな側面，レベルからの分析，了解が治療のプロセスを進行させていく。本報告では子どもの行動だけを分析し，セラピスト側の要因が分析されていないが，これについては今後の課題としたい。

Ⅵ　要　　約

素質的なものを基盤に家庭内の緊張や葛藤などの環境からの圧力による情緒的問題として吃音症状を呈したと考えられる3才1カ月の男児に，1年10カ月にわたり53回の遊戯療法をこころみた。集団遊戯療法で20回，その後，個人遊戯療法で33回実施した。治療過程は子どもの示した行動から導入期，抵抗期，甘えと攻撃期，創造と再構成期（Ⅰ），離反期（Ⅰ），創造と再構成期（Ⅱ）及び離反期（Ⅱ）の6期にわけられた。最後の創造と再構成期（Ⅱ）及び離反期（Ⅱ）は2回目の再開期にあたり，（Ⅰ）のくり返しであった。甘えと攻撃期では，自己主張，優越欲求，支配欲求が非常に強く，他児との競争，攻撃をはげしく表現した。また自分の愛着の対象となったぬいぐるみの人形や自分を守ってくれるウルトラマン，カメンライダー等をかわいがり世話し，シンボリックな形で愛情欲求を表現した。個人療法になり，全面的にセラピストに受けとめてもらい，自我の再形成が行われた。木のツミキでの家の建造や砂場での構成活動，黒板への描画に本児の自我の再形成の過程が，よく表現されていた。吃音は甘えと攻撃期に一番はげしく，創造と再構成期（Ⅰ）（Ⅱ），離反期（Ⅰ）（Ⅱ）では減少した。本児の治療が長期にわたった原因として次の2つが考えられる。1つは，最初，集団遊戯療法で実施したために，本児の欲求をセラピストが十分にうけとめることができず，優越欲求の強い本児の競争心を刺激し，他児への攻撃を増大させ，混乱させたこと，第2に家庭

で本児への配慮がなされ，家族環境が安定したものになるのに長期をを要したことによっていると考えた。子どもの治療では，子どもへのアプローチ以上に，母親を中心とした家族へのアプローチが重要である。長期間を要したが，この遊戯療法は，本児の自我の強化に効果があったと考える。

おわりに，本症例を御紹介下さいました島根県中央児童相談所に厚く御礼申しあげます。

また，本症例につきまして御指導，御助言下さいました島根大学教育学部稲浪正充教授に厚く感謝の意を表します。なお，集団遊戯療法は昭和55年度島根大学教育学部卒業生福間恵子・毛利佐奈江・岩田久美子・日笠直子との共同研究である。遊戯療法やVTR録画にあたり沢山の方々の御協力をえました。ここに厚く感謝の意を表します。

文　献

秋山俊夫・鶴光代・前田玲子　1970　幼児の吃音に対する集団心理療法　福岡教育大学紀要（教職科編），**20**，93－103.

アクスライン　小林治夫（訳）　1959　遊戯療法　岩崎書店（Axline, U. M. 1947 Play therapy. Houghton Miffin.）

Bloodstein, O. 1977 Stuttering. *J. speech Hearing Dis.*, **42**, 148－151.

遠藤真・坂野文子・倉林照雄　1981　学童吃音児の治療終結時の症状と予後　特殊教育学研究，**19**(1)，48－56.

深谷和子　1974　幼児・児童の遊戯療法　黎明書房

福島章　1973　攻撃性の精神力学　精神医学，**15**(6)，580－606.

権平俊子　1960　左手畸形をともなえる吃音児の治療的経験　児童精神医学とその近接領域，1(3)，84－94.

掘要　1962　子どもの精神療法　小児の精神と神経，**5**　65－76.

神山五郎　1967　吃音研究ハンドブック　金剛出版

川口宏　1960　吃音児の精神医学的研究　和歌山医学，**12**(2)，241－266.

河合隼雄　1969　箱庭療法　誠信書房

日下仁夫　1970　吃音児の臨床心理学等研究――児童期の吃音児に対する集団心理療法について　臨床心理学研究，**8**(4)244－252.

Levy, N. J. & Kelman, H. 1977 Aggression : Horney's view. In Wolman, B. B. (ed.) 1977 International encyclopedia of psychiatry, psychology, psychoanalysis & neurology. Aesculapius Publishers. vol.1. pp328.

松岡高　1965　吃音児の臨床心理学的研究　臨床心理，**4**(3)，168－180.

小椋たみ子・吉田猛　1972　絵画療法の研究（Ⅶ）―治療過程における〝死〟と〝誕生〟のモチーフについて　日本心理学会第36回大会発表論文集，516－517.

大西俊江・小椋たみ子　1982　一吃音児の母親面接過程の研究　島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編），**16**，71－87.

ストー　高橋哲郎（訳）　1973　人間の攻撃心　晶文社（Storr, A. 1968 Human aggression. The penguine press.）

玉井収介　1959　吃音を主訴とする幼児の遊戯療法　精神医学，**1**(9)，63－67.

対馬忠　1977　人間性としての攻撃の心理―その(1)―悪性の攻撃を中心にして―　金沢大学教育学部紀要（教育科学），**26**，93－103.

内須川洸　1979　吃音　内山喜久雄（監修）　言語障害事典　岩崎学術出版社　pp.59－61.

若葉陽子・松野紀子・安藤京子・内須川洸　1968　吃音児に関する臨的床研究　Ⅰ，治療法について―その1　東京学芸大学特殊教育研究施設紀要，**2**，108－152.

若葉陽子・松野紀子・飯高京子・内須川洸　1970　吃音児に関する臨床的研究　Ⅰ，治療法について―その2　東京学芸大学特殊教育研究施設紀要，**3**，175－197.

若葉陽子・松野紀子　1971　吃音児に関する臨床的研究　Ⅰ，治療法について―その3　東京学芸大学特殊教育研究施設紀要，**4**，149－168.

ウィニコット　橋本雅雄（訳）　1979　遊ぶことと現実　岩崎学術出版社（Winnicott, D. W. 1971 Playing and reality. Tavistock Publication.）

柳川光章・藤掛永良　1962　三才児の問題行動の概括的研究　児童精神医学とその近接領域，**3**(2)，107－121.

柳川光章　1974　吃音の起因と母・子の性格傾性　児童精神医学とその近接領域，**15**(1)，22－28.